
名前のない物語(仮)

ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前のない物語（仮）

【Nコード】

N7074Y

【作者名】

ユキ

【あらすじ】

なぜ私は生きているんだろう。
なんで私はココにいるんだろう。 私の存在意味が分らない。
だれか…私を愛してください。
そんな私の前に現れたのは、とても綺麗な人達？だった。
私を必要としてくれますか…？

・ 注意！！最初はとても暗いです。
・ ・

ただ愛される。そんな物語を書いてみたかった。

気分が落ち込んでいるときに見ていただけるといいかも知れません。

深い意味はありません。設定もまばらで伏線の意味もナシ。

でも自分が思い描いた無条件に愛される…そう、『溺愛』される物語を書いてみたかったです。

お付き合いいただければ幸いです。

それでは…本編へどうぞ。

ザアアアア...

雨の降る音木霊する。

私は...自分では頑張った。
頑張っていたつもりでいた。

けど...

家でも...

会社でも...

どこにいても...

私の居場所はない。

会社に行つては言われる。
思われているのがその視線で分る。
自意識過剰なんかではなく本当のこと。

「グズツ デブ…そこにいると邪魔なんだよ!!」

私は確かに人より太っている。
それは自覚しているつもりだ。

でも…

それほど邪魔なんだろうか…

「あんたはやってるつもりでも、周りにそれが伝わらなくちゃやってないのも変らないんだから」

そう言って書類を投げられたことが一度だけではない。
正論だといわれるとそうなのかも知れない。
だから、本当に私は何をやってもダメなんだろう。

「役立たず!!」

書類を印刷するように上司に頼まれたと同僚に言われ…
その時の同僚には急いでいるから替わって欲しいといわれた。
だから私は印刷した。

それを上司に持っていったら…
その場で…

「何必要ないことしてんだよ!!」

と無残に捨てられることも一度だけではない。
それを見て嘲笑しかえっていく同期たち。
私を助けてくれる人は誰もいなかった。

口下手で…

相手の思っていることが上手く聞き取ることの出来ない私はミスが多かった。

接客業に就いている私には致命的なことだろう。
無理に明るく振舞っているつもりでも…

私が自己満足に頑張っているつもりでしかない。

だからお客様にも言われてしまった。

面前で書類に署名をいただくとき。

「貴女よくここにいるわね。」

怒りで手が震えてこんなになってしまったわっ。
いいから早くしてちょうだいっ!!!」

そう言うてに怒鳴られ…

くしゃくしゃで震えた文字の書かれた書類を叩きつけるように示された。

そして…眼光強く睨みつけ処理が終わるのを言葉にだして急かされた。

お客様が分るように自分では一生懸命説明した。

分ってもらおうと工夫し、努力したのだ。

だから…

お客様も分ってくれたと思ったのに…

なつとくして一度はお帰りいただけたと思ったのに…

それは私の自己満足でしかなかった。

最終的には…

分ってもらえず…

もう一度私の目の前に現れたお客様はお怒りで…

その時の私の対応が会社への苦情となってしまった。

何をやっても自分なりに工夫しても伝わらない。

上司もさも迷惑そうに私をみる。

それはそうだろう。

私が失敗してお客様に誤りに行くのは会社の名誉のため下端ではなく上司だからというのも理由だから…。

失敗する私が悪いのは分っているから迷惑がられるのは仕方が無い
と思った。

どれだけ自分で努力しても…

それは自分がそう思っているだけ。

日々の成長が見られない。

そう周りには言われる。

私なりの一生懸命やった結果は…

すべてダメらしい。

辛かった。

「お前のせいで仕事が増えた！！
後で始末書を提出しろよ！！
まったく…何をやってるんだっ！！！」

誰にも伝わらない。
がんばっても…

一応正社員として雇われている私。

何度パートさんの方が役に立つと何度言われたか分らない。

正社員…だからだろうか…

出来が悪すぎて周りにも悪影響をあたえてしまう。

たとえ理不尽な理由でも全ては私が悪い。
そう。

もう誰にも何も私の言葉は信じてもらえなかった。

人間関係も…

仕事も…

上手くいかない毎日。

やれといわれて提示される仕事。

やり方も教えられないまま…

聞いても忙しいと私に向き合ってくれる人はいなかった。

そう。

誰もいなかったのだ。

私の言葉は…

何もかも必要のないもののように。

頑張ったのに…

出来る限り役に立ちたくて…

でも、何をしてもダメ。

存在がダメらしいと悔しさを抱える毎日。

私は何をやってもダメなんだと思わずにはいられない。

働くとはこういうことなのだろうか…

社会とは…

冷たく厳しいもの…

そういうものらしい。

それでもこの仕事を続けお客様の前に出るのは生活するために…

生きるために必要だから。

そう思っただけだ。

でも、それも今では良く分からなくなっている。

だって…

笑顔を絶やさず頑張っているはずだった。

出来るだけ声を出し。

会話を続けようとした。

だけど、その頑張りは空回り。

伝わらない。

ただのお荷物でしかなかった。

それでも私がこの会社をやめないのは…

自分が生きるため。

自分の居場所を…

すこしでも必要としてくれていると感じようとしているからだったハズ。

だけど…。

今は…

自分が生きることなどどうでもいいように感じていた。

そう。

早くこの人生を終わらせたかった。

疲れ果てて家に帰り着いても私に安らぎの時はない。

仕事が終わリ…

でも、私に安息はない。

家に帰っても環境は変わらないのだ。

迎えてくれる人などいない。

家に帰るといるのは他人。

そう家族とも呼べない冷たい関係の人たち。

私はただ給料が入ったときにそれを家に入れるただけにいる。

私の給料が入ればしっかりとチェックされその大半を家の人にとっていかれる。

明細を見せてしっかり根こそぎ持つていくのだから…
誤魔化しようがない。

そして、持つていくのは私の実の父母ではない。

待つているのは本当の家族ではないのだ。

父母は知らない。

暖かな家族の記憶はなかった。

物心付く頃には私は親戚をたらいまわしされていたから。

親戚と言つてもそんなにいない中で何年かの交代制で回つている。

私は邪魔者以外の何者でもないのだらう。

働き始めてからはお金入れるならと、今の叔父夫婦の家では結構長いこと住まわせてもらつてゐる。

でも、最近の不景気から私の給料も減り始め…

先ほどは… ついに… 帰り際に上司に呼ばれ辞表を書くように言われた。

会社が辞めさせるのは世間体があるから…

自分から辞めるように… そういうことだ。

上司の前の前で辞表を書かされた。

断ることは出来なかった。

内容までプリントされ、私は名前を記入するだけになっていたから。名前を書くまで帰さない。

でも、上司は早く帰りたいかったのだろう。

名前を印字した紙に私に拇印を押させたのだ。

これで私は強制的に仕事を辞めさせられてしまった。

すでにどこにも居場所のない私。

相談する人もいない。

否を唱えることなどできるはずがなかった。

ただいるだけでも邪魔な存在になっていたのだから。

私は会社でも…

そして、収入のない私は家でもいるだけで邪魔な存在となった。

家に帰り着いて会社での出来事を報告した。

これからまた新しい仕事が見つかるまでお金を入れることが出来ないから。

屋根があるだけでも私にとっては救いだ。

早く次の仕事を見つけるよう努力する… だからそれまでお金を入るのを待つて欲しい。

そう必死に懇願した。

……。

「グズっ！！　ほんとにあんたはダメだね。
何をやってるんだい！！　このご時勢で仕事を無くして！！
ここに置いてやってる恩を忘れたのかいっ？」

「出て行け！！　役立たず！！

すっかり働き口を見つけてまた金を入れられるようになったら家の隅においてやる。

それまで帰ってくるなよ！！

まあ…お前のような奴を雇う企業があるわけねえがなっ！！！！」

「あんたなんて要らない子だよ。　出ておいきっ！！」

廊下の端でこちらをみて笑っている叔父夫婦の娘の姿を見た。
知らないものを見るような目で私を見ていた。

雨が降り続けている…

それは…

どこに降っている雨？

私の全ては悲鳴を上げていた。

だから…もう…なにも感じなかった。

私は…声も涙すら出なかった。

そんな私のかわりに空が泣いてくれるのだろうか…。

冬から春になりかけのこの季節。
まだまだ外の風は冷たい。
気温も低く雨は私を冷やしていく。
行く当ても無く玄関先で思い悩んでいた私の前に現実突きつけられるしかなかった。

ガラララッ

不意に扉が開いて背中が押される。

「邪魔だよ！

こんなところで突っ立ってないで早くどこかにお行きっ」

そう言って投げられたのは…

わずかばかりの荷物。

この家の中にあって私の私物といえるもの…

財布。

着古した着替え…

手に乗るほどの小物…

ただそれだけ。

私は行く当ても無いままただ進むしかなかった。

空からの雨は強くなる。

その冷たさが心に…身体に染みていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7074y/>

名前のない物語(仮)

2011年12月21日12時53分発行